

116年目の門戸開放

—日本の天文学シーンを変えていく国立天文台広報普及室—

渡 部 潤 一

〈国立天文台広報普及室長 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1〉
e-mail: watanabe@pub.mtk.nao.ac.jp

1996年4月12日の金曜日、116年にわたって閉ざされてきた国立天文台三鷹キャンパスの門が開かれた。100名を超える家族連れが、中学生が、そしてお年寄りが、続々と門をくぐり、50cm望遠鏡の中に溢れる宇宙を感じた。天文学の魅力を多くの人に知ってもらうために、そして感動を子供たちに伝えるために、今夜も国立天文台広報普及室が活躍する。

1. プロローグ

ある日曜日、三鷹の国立天文台正門前に高校生とおぼしき数人の男子生徒が立っていた。「おい、どうすんだよ」という声が聞こえた。どこかの天文クラブの子供たちだろうか。どうやら国立天文台の見学に来たらしい。彼らの前には、ぴたりと閉ざされた正門と「関係者以外立入禁止」の立て札だけが、冷たくそびえていた。残念ながら、国立天文台三鷹キャンパスはこういった見学者に対して、(年に一度の一般公開をのぞけば)構内を開放していなかった。

脳裏をある体験がよぎった。それは私がまだ高校生の頃、近くにある有名な天体観測所の見学を申し込んで断られたことだ。もちろん、これは当然であった。その観測所が個人の所有するものだったからである。ただ、断られたのが少なからずショックであったことにはまちがいない。私が東京近郊の高校生で、やはり同じように国立天文台へ見学にきて、断られたとしたら、どう思っただろう。しかも、ここは研究機関とはいえ公立の天文台である。アメリカの天文台のようなビジターセンターがあってもいいのではないか。

私はそれまで、ハワイ大学滞在中に、何人かの人から広報関係の仕事をするよう言われていた。もちろん、当時はずっと断り続けていた。研究者

としては、あまり恵まれた職種ではない。しかし、この事件をきっかけに少し考えが変わった。誰かがやらなくてはならないな、と思った。もちろん、自分の研究はかなり犠牲にせざるをえない。だが少なくとも研究機関だからといって、このように門戸を閉ざしていい時代ではない。少しずつでも改善しなくてはならない。改善できるのは、それを必要だと心から思っている人間である。自分は少なくともその一人なのかもしれない、と思いはじめていた。

2. 降って湧いた望遠鏡

「実は、社会教育用という名目の望遠鏡の予算がついたんだが、やってくれないか。」

Kさんに話を聞いたときには、わが耳を疑った。タイミングがよすぎる。

「そのかわり、しばらく研究はできなくなるよ。」
すでに、その覚悟はできていた。なに、行政官に徹すればいい。

「貧乏くじを引かされたね。」

何人もの人から、そんな風に揶揄された。もとより、私のような会津の人間は幕末の頃から、そういう運命にある。前向きに滅びの美学を生きてみよう。

「彗星の木星衝突はどうするの？」

これがいちばん辛かった。1993年に発見された

シューメーカー・レビー第9彗星がその年の夏に木星に衝突する予定だった。人類がはじめてみる大規模な天体衝突だ。そんな現象を前にして戦列を離れていいのか。だが、まて。すでに素晴らしい共同研究グループがいるではないか。あとはマネージャーとして指揮を取ればいい。むしろ、この希有な現象と、それに携わる研究現場の興奮を多くの人に伝えるのが私の責務だろう。

「適任、適任。適材適所。」

同室だったHさんは、私が現在のオフィスへ引っ越すときにそういつて見送ってくれた。なんでもない言葉が胸に染みる時がある。

かくして、私は新しく降って湧いた社会教育用公開望遠鏡の機種選定から設置にいたるまでを一手に引き受けることになり、そのごたごたがおさまらないうちに天文情報普及室が改編され、新天体情報室と広報普及室とが誕生した。1994年4月1日のことである。

3. 仁義と決意と

4月1日発足の日、私は新しい広報普及室長として宇宙科学研究所へ向かった。この種の広報活動では先輩であり、しかも当時は明らかにリードされていた「対外協力室」へ挨拶をするためであった。温厚なM先生は、対外協力室の組織や活動、そしてそれまでの経験から様々なアドバイスをしてくださった。いつか、いっしょに何かを企画できればいいですね、というようなことを言ってくださったのを覚えている。そうですね、と相づちはうったものの、国立天文台側の地力は、正直言ってそこまではなかった。大いなる兄貴分のどっしりとした貫禄を前に、これは頼りになるな、という親近感と、仁義を切っておいてよかったという安心感と、いつかはいい意味でのライバルになってみせるという決意とが入り交じった気持ちを胸に、飲んだビールの味は苦かった。

4. 望遠鏡はできたけれど

だが、開放への道は険しい。望遠鏡の設置場所さえも二転三転し、やっと解決してみれば、電気がない、ネットワークがない、お金が足りない、のらないいづくし。挙げ句の果てに、その場所は木に囲まれて空なんか見えない。

「まるでアレシボ望遠鏡だな。」

冷やかに来たYさんの第一声。このままでは恥ずかしくてとても公開できない。また、公開用とはいっても、しっかりした研究仕様となっており、液体窒素冷却のCCD撮像装置を無理して導入したこともあって、望遠鏡はできたけれど、いつになったら観測も観望もできるのか、という感が強かった。それまで広報普及室の常勤職員にはハードの弱い私と神田泰さんしかいなかったからである。

しかし、その心配は一挙に解決した。1995年4月、乗鞍コロナ観測所から福島英雄さんが広報普及室に着任したのである。彼はコロナ観測所時代から、自前で空冷式の冷却CCDを買い込んだり、自作の望遠鏡をつくったりする技術力とノウハウを持っていて、最近ではアマチュア天文家むけの教科書も書いている。毎晩のように50cmで泊まり込むようになると、みるみる望遠鏡は整備され、たった2ヶ月ほどで観望ができるようになった。

6月8日には、お披露目が盛大に行われ、これ以降、散発的に来台する文部省などからのお客さんや、大学の課外授業、都民カレッジの見学などに対応をはじめることができた。その後の50cm望遠鏡の活躍は目を見張るものがある。大きく報道されたような百武彗星をはじめとする彗星の核近傍現象の観測ばかりではなく、1995年8月11日の土星の環が見かけ上消失する現象を5日連続で捉えたり、小惑星などの位置観測、光干渉実験、教育用の銀河の3色合成写真撮影、学部学生の実習や卒業研究など、晴れた夜に50cmのドームが開かないことはほとんどない。また、プロの天体

望遠鏡としては恥ずかしいことだが、お金がなくて望遠鏡をGL(グランドレベル)に設置してしまったのが、逆に身障者に喜ばれた。そこで、車椅子に座ったままで観望できる接眼部延長機構をとりつけるなどの改良も行った。邪魔になっていた樹木の伐採も進み、サポートスタッフも新天体情報室や開発実験センター、古巣の光学赤外線天文学研究系などから応援があり、管理部職員の休日出勤の了解も取付け、学生ボランティアも相当の人数が集まって、定例の一般観望会にむけた準備は着々と進んでいった。

5. 変わらなきゃ、国立天文台

ところで公開するのは望遠鏡だけでいいはずがない。一般の人や子供たちに天文学の成果や感動を伝えたい。国立天文台として、広報普及室として、いったいどうしたらいいだろうか。原則論からいえば、国立の研究機関として、情報公開・成果の公表等を積極的に行っていくことは、納税者への還元という意味で義務である。研究の成果を積極的に広報し、また、さまざまな社会のニーズに応えることで、研究者はもちろんのこと、一般の方々の理解を得られるような活動を行うのが広報活動である。私は広報普及室発足後の最初の委員会で、三つの目標を掲げた。すなわち以下のような「変わらなきゃ、国立天文台」である。

- (1) 触れられる国立天文台へ
- (2) よく知られた国立天文台へ
- (3) より親切的な国立天文台へ

の3つの「変わらなきゃ」の目標は、いずれも発足以来のこの2年間で劇的に進展したと自負している。幸運なことに、これらの点に関して天文台内外からの多くのサポーターに恵まれていたからで、決して広報普及室だけで実現できたものではない。例えば、公開講座や講演会、観望会を通じて三鷹キャンパスの開放を目指すのが(1)であったが、これには地元の三鷹市や多摩六都科学館などの協力が得られ、大人向けと子供向けの公開講座

が軌道にのった。定例の昼の見学ツアーも管理部職員と見学施設担当職員の協力で、引き続き行われている。

一方、積極的な情報発信を行おうという主旨の活動では、彗星の木星衝突や地球接近などの機会を捉え、記者会見を開くなどの積極的手法が功を奏し、多くのマスコミで誤った情報が伝わるのを最小限に抑えている。さらに、いわゆる電子広報を重視し、インターネットやパソコン通信上では国立天文台発の情報が飛躍的に増えた。もとより、これは事前に大手パソコン通信の中で国立天文台に対する意見の収集を行うという画期的な調査に基づく方針であった。研究者むけのニュースサービスの試験運用や、電子メールによる一般向け天文ニュースの発信、インターネットのホームページ開設・整備¹⁾(図1)、公開天文台ネットワーク(PAONET)の運用開始^{2,3)}(図2)などが目白押しである。これらひとつひとつについて詳しく述べる余裕はないので、ここでは省かせていただく。ただ、なにぶん広報普及室のマンパワー不足は否めず、とりわけ電子媒体を扱うハードに強い人材がいなかったため、天文学データ解析計算センターだけでなく、台外の有志を広報普及委員会から「電子広報作業ワーキンググループ」として承認いただき、土日に作業してもらうなどの多大な協力を得ている。そのため、広報普及室の土日の人口密度は平日よりも多い。

さらに、さまざまな要望に応えられる受動的情報サービスの整備も進めている。マスコミ等からの資料提供要請への対応・紹介や、天文情報普及室時代から引き継いだ業務である自治体・裁判所等の公的機関からの資料提供要請への対応・公文書作成、それに一般質問電話なども非常勤職員総動員で対応しており、これも(2)の努力目標が効が奏してか、この2年間でほぼ20%増、年間9000件強の問い合わせを処理している。「変わらなきゃ、国立天文台」から「変わってきたよ、国立天文台」への変貌は著しい。

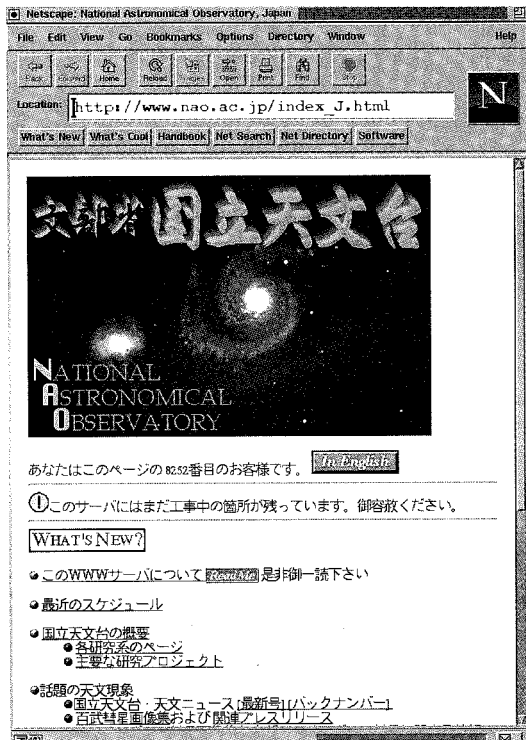


図1 3月21日から正式に公開が始まった国立天文台ホームページ

6. 議論より実践「スター・ウィーク～星空に親しむ週間～」

変貌を遂げる国立天文台の広報活動の中でも、とりわけ驚きを持って迎えられたのが「バード・ウィーク」の向こうを張った「スター・ウィーク」の実施である。事の起りは、1995年6月に岐阜で開催された「全国天体観測施設の会」のパネルディスカッションであった。各施設では来訪者数の減少が問題になっていた。どうしたら天文離れをくい止め、より多くの人に天文に親んでもらえるか、というテーマで議論が進んでいた。パネリストとして出席していた私は、机上の議論でなく直接的な実践を、例えば全国規模の「バード・ウィーク」的なキャンペーンを行ってはどうか、と

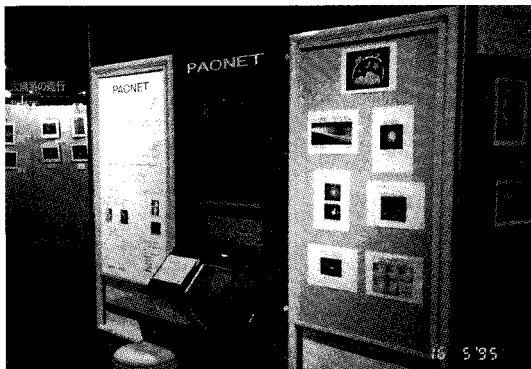


図2 公開天文台ネットワーク (PAONET) は多くの施設に最新の天文情報や画像を送り続けている。写真は、大阪市立科学館に設置された展示コーナー (渡部義弥氏提供)

発言したのがきっかけで、その日の深夜の宴会で基本方針が決定してしまった。

夏休み中の8月1日からの一週間を「スター・ウィーク」と定め、全国に散らばった公開天文台・科学館・プラネタリウム・天文関係公開施設・同好会等の観望会やイベントを一括して宣伝し、小・中学生から高齢者にいたるまで幅広く星空に親んでもらおう、というものである。これを機会に一般の方々の星空への関心を高め、天文学・宇宙科学の普及・教育に資することを目的とした一種のキャンペーンである。各地の施設の定例観望会を含めたイベント日程を調査し、賛同を得られた施設のイベントのリストアップを行い、これを「スター・ウィーク」イベントとして事務局から広報することになった。初年度は準備に2ヶ月しかなかったため、どれだけ賛同を得られるか不安であったが、蓋をあけてみれば阪神大震災の被災者を勇気づけようと企画された「神戸星祭り」をはじめ、なんと127団体(図3)もの参加を得て、大成功に終わった。一方、協賛の手続きが間に合わなかった施設も散見され、今年度はさらに

図3 1995年8月1日から7日までの間、全国でスター・ウィーク「星空に親しむ週間」に協賛するイベントが行われた。図はその127施設の分布。



議論よりも有効かつ重要であろう。スター・ウィークのイベントを知って、これに参加した子供たちは、その施設でPAONETを通じて国立天文台から送られた最新の天文画像に目をみはり、掲示された国立天文台・天文ニュースを読むことだろう。日本の天文学シーンは、われわれの努力で確実に変わっていく。

7. エピローグ：116年目の門戸開放

難産の末に実現した初めての50 cm 社会教育用公開望遠鏡の一般向け定例観望会は4月12日の夜であった。(図4, 5) 4月にしては珍しく、西高東低の冬型で空は晴れわたり、折から話題の百武彗星が北西の空に浮かんでいた。桜の季節にしては猛烈に冷え込む中を、多くの家族連れが、子供たちが、そして老人夫婦が、次々と三鷹キャンパスに入構してきた。国立天文台の前身である東京大学東京天文台ができてから116年、

多くの参加が見込まれている。いずれは、バード・ウィーク並の国民的に認知されたものにしていきたい。これに関しては学会の方々からも反響が多く、驚きと賞賛の電子メールを多数載っている。ただ、スター・ウィークという事業も、広報普及室が事務局を引き受け、まとめ役を買って出ているが、実際には天文学振興財団等の援助と多くの施設の職員のボランティアで成り立っていることを忘れてはいけない。

昨今、天文を含めた理科離れの問題は多くの場所で議論が重ねられているようだが、本当に理科の楽しさを教える現場を増やす事が、百の机上の

三鷹キャンパスに移転してから、実に88年。ぴたりと閉ざされていた門はいま開け放たれたのである。なにしろ、研究機関としては未知の経験で、すでに予測しない出来事に直面し、また厳しいお叱りや苦情をいわれている。それでも、われわれは今後も毎月2回第2土曜の前日の金曜と、第4土曜に三鷹キャンパスを開放していこう。そして、このキャンパスはわれわれ天文学者だけではなく、一般の人にとっても宇宙への夢の入り口となる。

私は50 cmのドームに居並ぶお客さんの誘導をしながら、暗がりの中で無意識に誰かを探して

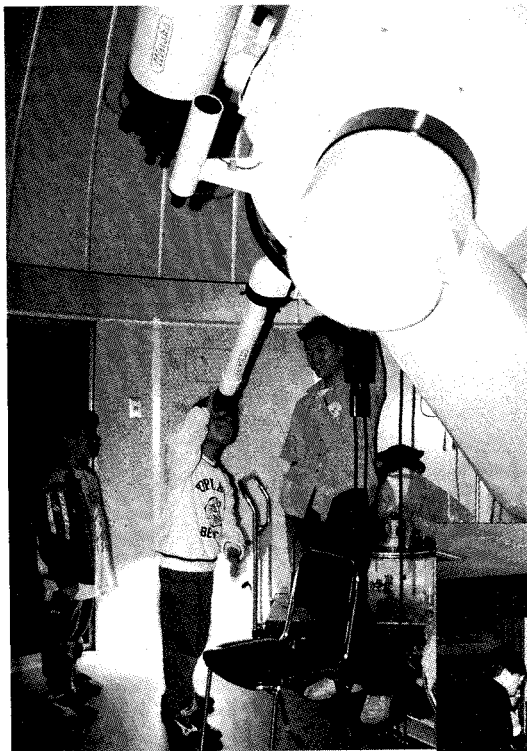


図4 三鷹キャンパスの社会教育用公開望遠鏡
で観望を楽しむ子供たち



図5 観望会の受付風景

いた。その時にはいったい誰を探しているのか思
いつかなかった。それが、あの時の門前払いをく
って戸惑っていた学生たちだったことに気がつい
たのは、ずっと後になってからのことであった。

参 考 文 献

- 1) 高田昌之, 天文月報, 1996年8月号 p322-328, 89
- 2) 尾久土正巳, 天文月報, 1995年3月号, 88, 79
- 3) 渡部義弥, パリティ, 1996年7月号, 11, 60-63